



70号 令和5年11月20日

<学校教育目標>

自ら伸びる ともに伸びる

校長だより

呉市立市阿賀小学校
安宗 誠



新井監督 私が感じた魅力

ペナントレースが終わってしばらく経ちますが、その中でいまだに感心していること。それは、試合中の広島カープ新井監督の表情・態度です。選手が結果を出したときのことではなく、選手がエラーをしたとき、チャンスをつぶしたときのこと。少なくとも私が見るかぎり、怒ったり不機嫌になったりということは一切なく、むしろ、まるで選手の気持ち分かっているかのような表情・態度を貫き通していたように見受けました。そこに魅力を感じたのは私だけでしょうか？

なかなか、できることではないと思いますし、人として本当に尊敬できる方だと思います。その人となりにつながる新井監督の言葉・エピソードを見付けましたので、いくつか紹介したいと思います。

「2人で川辺を歩いていたとき、川にごみを投げ捨てる子供達がいた。相手は見るからに年上なのに、新井は肩をつかんで、“やめろ”と言って止めた。びびっている私に“悪いことをしとるんじゃけえ、注意せんといけんじゃろう”と言う。それから私の新井を見る目が少し変わったように思う。」(新井監督の子供時代 友人が語るエピソード)

「いつも心の中で“ありがとうございます”って言っていました。だって人間、怒ることっていちばん体力がいることじゃないですか。」(新井監督 選手として入団直後の猛特訓を振り返って)

「新井は後ろに守っていてほしい選手だった。サードで鈍臭いエラーをしても“すみません”と元気よく言う。ピンチになると、明るい調子でよく声をかけてくれた。そんな姿を見せられると、こちらもがんばろうと思えた。」(高橋健 現2軍投手コーチが同僚時代を振り返って)

「失敗してもいい。ミスしてもいい。ストライクを打って、ボール球を見極める。そんなのができたら、みんな3割打者だ。」(新井監督 就任後)

「カープという家にみんなが住んでいる。やるときはとことんやる。苦しい時、悲しい時は共有する。・・・みんな家族だから。」(新井監督 就任後)

(迫勝則 著『逆境の美学 新井カープ“まさか”の日本一へ』南々社より一部抜粋)